十五世紀後半フィレンツェの〈トビアと天使〉の流行とサンタ・フェリチタ修道院における大天使ラファエル顕現の奇蹟

東京大学　芳賀 里恵

15 世紀後半のフィレンツェでは、旧約聖書「トビト記」出典の〈トビアと大天使ラファエル〉（以下〈トビアと天使〉）が急速に人気を得て大量に描かれた。この図像が制作された背景について、息子の旅路祈願を理由に挙げた 1945 年のアッヘンバッハ説と、この説が史料の証左をもたないため留保をつけた 1949 年のゴンブリッチ説がある。しかしその後は個別作品の研究しかされていないため、この図像が希求された背景について従来指摘されてこなかった観点を見出すことに努めた。その結果、以下のようなことがわかった。

注文関係が判っている作品総数 27 点中 15 点は、アッヘンバッハ、ゴンブリッチ両説にあてはまらず、何らかの形でアウグスティヌス会、サント･スピリト教会、あるいは同地区との関連で制作されており、彼等が特別この図像に関心があったことが予測される。事実、最も多くの〈トビアと天使〉が制作されたのは、同教会から集会所を与えられていた大天使ラファエル兄弟会「イル・ラッファ」の周辺であったが、アウグスティヌス会自体、ボッティチーニによる同兄弟会の祭壇画が制作される以前から〈トビアと天使〉の注文主であった。

他方、1423 年サント・スピリト地区のサンタ・フェリチタ修道院に、ローマへの旅の途上の大天使ラファエルが巡礼の姿で顕われ､修道女達の苦難を去らせたという奇蹟があった。これを記念して修道院長が大天使顕現の場所に、その姿を巡礼の旅姿で描かせたという。これが〈トビアと天使〉制作の契機となった。同教会と同修道院は大天使顕現の奇蹟を遡ること２世紀前から重要な隣接関係にあり、この時期には同教会は地区の冠たる存在であった。加えて、修道会の別以上に地域性がコミュニティに強く作用していたため、大天使の奇蹟への信仰は、この地域全体のものとなった。つまり、この地区では大天使顕現の奇跡とイル・ラッファの存在とが相まって多くの〈トビアと天使〉が制作されたのである。

現在、フィレンツェのアカデミア美術館にあるドメニコ・ディ・ミケリーノの《三大天使》は、大天使の顕現を記念してミケーレ・ディ・コルソ・デッレ・コロンベの注文により 1460－70 年頃制作され、サンタ・フェリチタ修道院の同家の祭壇に設置されていた。これに付された碑文は当時、この地域における大天使の奇蹟への熱狂的信望を明示しており、15 世紀後半のフィレンツェにおける〈トビアと天使〉制作の状況の一端を説明してくれる。裏返すと、この時期に制作された多数の〈トビアと天使〉の残存は、それらが制作された時期に、こうした宗教的熱狂があった事実を証していると言えるであろう。以上の考察は先行研究で指摘されておらず、〈トビアと天使〉制作の新たな局面を示すものと思われる。